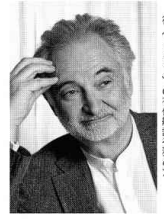


James Hill 仏国立行政学専攻。経済学者。1991年、ミラノ大学経済学部の特別顧問。91-93年、欧州復興開発銀行（EBRD）の初代総長を務めた。



次のような光景を想像してほしい。豪華な料理が立食形式で用意された飯（フレンチ）で、大勢の男女が歓談し、踊っている。参加者は（満席だ。今後の計画を懇話する会話があら）から聞こえる。参加者に一人だけ、しつこく観察眼の鋭い男がいた。宴会場は少し静め状態だ。出口は狭い廊下の突き当たりにつきない。え、小さい。すべての窓は分厚いカーテンで覆われ、どこぞで開けられ、はよかわからない。カーテンの前には巨大なロウソク台が置かれている。ロウソクの炎は人々の動きにあおられ、不気味に揺る。火災が起れば全員が死ぬだろう。観察眼の鋭い男にはいつかの選択肢があった。まず、会場のマイクを使って全員に状況を説明し、一刻も早く外に避難するよう誘導する。もしくは、だが実行すれば、大勢の人々が狭い廊下に殺到して、倒しになるかもしれない。慌てて逃げようとする人々がロウソク台を倒すと、火災を誘発するのは間違いない。

「命の経済」への転換を

元欧州復興開発銀行総裁 ジャック・アタリ氏

のな問題に直面している」と考えるなど、最悪の事態を恐れた。地球を脱出しようと思いを言まで出てくる。国の単位で考えれば、危機を回避するのみの行動を起す。国や自国をおおって大規模な移民を生む。自国の将来を破壊してしまう。危機など気にしない国などが存在するだろう。国の場でも、解決策を提示せずに白紙を上回るの是最悪の対応だ。国は、将来世代が世界や自国で暮らすようになるよう努力すべきなのに、国民の利利的な暮らしを放棄しているのが現状といえる。企業や家族の単位でも、考察は可能だ。人々は新型コロナウィルスの急激な移動の問題に直面して、現在と未来の不安を二つに分けて考える解決策はないと悩まはす。解決策があるならば、パンクや絶望を引き起さずに現実を伝える方法を思い出し、早期に全員参加型の対策を講じた。利利的な「命の経済」を、再生を重んじる「命の経済」へ転換せよ。地球という愛での私たちが将来世代の暮らしは改善された。人々は絶滅するまで地球を尊重しなければならぬ。パンクや絶望はあきらめは解決策にならない。勝負はいまからだ。勇気を持って全力で闘う。どうか、私たちに代わって。



英文記事はこちら

たのだから、勝たつて大々々と宴を築き、お祭り騒ぎの切りがある。3つめは、出口近々に陣取って用心深く振る舞うことだ。最後に、無言で独り立ち去るという選択もある。命は、せいたんや快楽とは無縁の世界を奪うべきことにならなければならない。受け止め方は様々かもしれないが、この光景は現在の世界のたとえだ。私たちは（一部だけが権能を）豪華な料理がすうりと並ぶような世界を奪う。ところが、公衆衛生も、候々の面々、無数の危機が迫る。危機が迫っても、人類は目をそらす。根拠を空振り切り、利己的な振る舞い、あきらめなどが主な態度だ。各国の国民単位を奪う。ほとんどの人々は利利的に暮らして危機を監視してはいない。危機を察知している者もいるが、現在の業しみを笑った。ないため傍観する。同時に、いつでも地方や外国へ逃げ出せよう準備している。準備を怠らさず暮らしている。結果として、マラルの進展が起り、パンクが発生するだろう。世界中で数百万人の人々が命を落とす。世界各地に産主主義に基づく政権が誕生することになる。世界中の誰もが自分たちは解決策